

白河の関

全鍍連 情報・国際副委員長 栗原 識
(株式会社大協製作所／神奈川県メッキ工業組合)

情報・国際委員を仰せつかっております株式会社大協製作所の栗原識と申します。今回は、弊社福島工場近隣に残る歴史的な名所「白河の関」についてご紹介いたします。

■白河の関とは

白河の関は、現在の福島県白河市にある古代の関所跡で、下野国（栃木県）との境付近に設置されました。奈良時代末～平安時代にかけて、都と陸奥国（東北地方）を結ぶ東山道の要衝として機能し、「みちのくの玄関口」と呼ばれました。奥州三関（白河関・勿来関・鼠ヶ関）の一つとして知られています。

白河の関は、単なる軍事的な検問所にとどまらず、「みちのく（未知の国）への入口」として文学・文化の象徴的な意味を持ち続けてきた場所です。

■古代（奈良～平安時代）

白河の関が設けられたのは、奈良時代末～平安時代初期（8世紀頃）と考えられています。当時、大和朝廷にとって東北地方はまだ完全に支配の及ばない「蝦夷（えみし）」の地であり、白河の関は朝廷の北限に位置する重要拠点でした。

その役割は以下の通りです。

- 人や物資の出入りを取り締まる関門
- 税や通行の管理拠点
- 蝦夷の侵入を防ぐ軍事的防衛拠点

799年の太政官符に記録が残り、8世紀末には確実に存在していたことが文献で確認されています。

■平安～鎌倉期：文学の舞台へ

平安時代中期以降、律令制の衰退や支配領域の北方拡大に伴い、関所としての実用的機能は次第に失われていきました。

しかしその後、白河の関は文学の世界で象徴的な存在となります。都の貴族や歌人にとって白河の関を越えることは、「文明世界を離れ、未知のみのくへ踏み入る」象徴的な体験でした。

代表的な詠歌として、次の二首が知られています。

- 能因法師（平安中期）「都をば霞とともに 出でしかど 秋風ぞ吹く 白河の関」
- 西行（平安末期）「白河の 関の関守 すえ据えて 名をば流さむ 心あるらむ」

■江戸期：芭蕉『奥の細道』

元禄2年（1689年）、松尾芭蕉は『奥の細道』の旅で白河の関を訪れました。その際に、「白河の関にかかりて旅心定まりぬ」と記し、みちのくへの旅の始まりを象徴する場所として描いています。

■現在

現在の白河関跡は国指定史跡となっており、以下の見どころがあります。

- 白河神社（関跡の中心）
- 従二位の杉（樹齢約800年と伝わる巨木）
- 古関蹟碑（松平定信建立）
- 空堀・土塁などの遺構

静かな森の中で、古代の歴史と旅情を感じられる場所として親しまれています。（東北自動車道：白河ICから約30分）

